

長沢縄文人の精神文化覚え書き

和田 哲

序

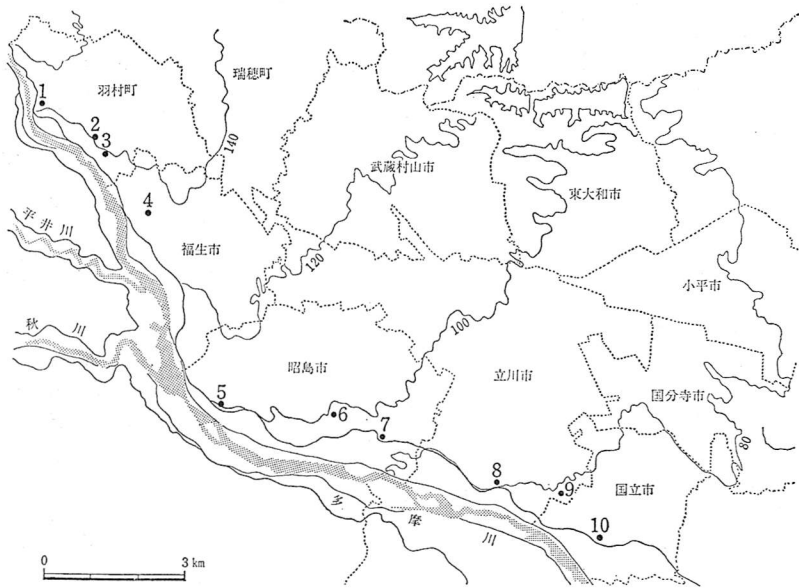
縄文文化の研究は、遺構や遺物といった物質的残存物を対象とした分野での研究は詳細に行われてきた。しかし、縄文人の社会構造や宗教、祭祀儀礼といった精神生活の分野に関する研究は遅れていると言わざるを得ない。この点は、縄文時代に限らず、遺跡、遺構、遺物といった残存物から実証的に論証するという方法論を基本とする考古学全体に亘る宿命的課題である。縄文社会復元のためには、遺

構、遺物の徹底した属性分析を通じ、また、人類学や民族学をはじめとする関連諸科学の成果を踏まえながら、研究を推進しなければならない。本稿では、福生市の縄文中期集落を代表する長沢遺跡の縄文人の、精神的側面の一端を述べてみたいと思う。『福生市史』上巻で「呪術の世界」という項を設け、若干触れているが、長沢遺跡は市史原稿

執筆後に、第八次調査^{注1}の新たな成果が加わったので、市史の補遺の意味を含めて記述しておきたい。

人間がヒトとしての動物的側面をもつとともに、精神的存在である以上、全ての行動には精神性が加味されていることは言を俟たない。その意味で、あらゆる遺構、遺物は精神的所産でもある。

ロバート・N・ベラーは宗教の歴史の変遷を五段階に分けている。即ち、原始 (primitive) 、古拙 (archaic) 、有史 (historic) 、初期近代 (early modern) 、現代 (modern) である。そして原始レベルの宗教について「原始レベルにおける宗教的象徴体系は「神話的世界」と特徴づけられるものであり、神話的世界は現実世界の細部の様相と関連させられている。人間世界と超自然は流動的に交流しているのである。しかし、神話的世界の構成要素は厳密に定義づけられていず、時と場合によって変化させられる。また原



第1図 多摩川流域の縄文中期主要遺跡

1. 羽村市精進バケ遺跡 2. 羽村市山根坂上遺跡 3. 羽村市羽ヶ田上遺跡 4. 福生市長沢遺跡 5. 昭島市龍津寺東遺跡 6. 昭島市西上遺跡 7. 昭島市広福寺台遺跡 8. 立川市大和田遺跡 9. 立川市向郷遺跡 10. 国立市南養寺遺跡

始レベルにおける宗教行為の特徴は儀式であって、礼拝や犠牲を特徴としない。儀式の参加者は、すべて神話的世界と一体化する。そして宗教生活は日常生活と同様、固定化していて集団の成員はその型の外に出ることはない。また、社会構造と別個の宗教組織は存在しない。宗教の役割は、年齢集団、性別の集団、親族集団など社会的に分化した集団の果す役割と融合し、宗教集団と社会集団が合致する。儀式生活は、成員の社会的連帯を強化し、種族の行動規範を若い人々に教育する点で、社会統合に寄与している。^{注2}と述べていることは、原始段階に位置づけられる縄文時代を考える上で示唆的である。

1 多摩川中流域の中期遺跡と精神文化

多摩川中流域には、大規模な集落遺跡が2〜3キロ間隔で点在することは周知の通りである。即ち、上流域から羽村市精進バケ遺跡（勝坂式期から加曾利E式期にかけての集落遺跡で、既発見住居址39軒で、環状集落が想定されている。土偶や釣手土器片も出土している）。羽村市山根坂上遺跡（加曾利E式期を主体とする環状集落で、既発見住居址64軒。祭祀遺構として大規模な配石址が発見され、釣手形土器三個体の出土も珍しい。他に土偶、顔面把手、イノシシ把手なども

出土している)。羽村市羽ヶ田上遺跡(山根坂上に隣接し、勝坂式期から加會利E式期の集落遺跡で、山根坂上遺跡の空白期の住居址があることから、両遺跡は相互に補充関係にあると考えられている。ただ、発掘域が狭いので、調査が進めば見直される可能性もある。既発見住居址13軒)。福生市長沢遺跡(勝坂式期から加會利E式期にかけての環状集落と推定され、中央部西寄りに土壇墓十数墓が発見されている。既発見住居址は約30軒、土偶、顔面付土器、石製垂飾などが発見されている)。昭島市龍津寺東遺跡(勝坂式期から縄文後期の加會利B式期にかけての長期に亘る集落遺跡である。大規模な調査が行われていないため住居址の発見数は少ないが、敷石住居なども発見されている。特に、後期に石錘が多出することは注目される)。広福寺台遺跡(勝坂式期から後期初頭に継続し、典型的な舌状台地に位置するが、主要部が墓地のため調査は進んでいない)。昭島市西上遺跡(ほぼ純粹に勝坂式期の集落遺跡で、既発見住居址約20軒。本地域の典型的勝坂式土器を多く出土し、土偶、顔面把手、有孔鍔付土器、イノシシと思われる獸面把手付土器などを出土している)。立川市大和田遺跡(縄文早期と勝坂・加會利E式期の集落遺跡で、既発見住居址13軒。勝坂式期の顔面把手が出土している)。立川市向郷遺跡(加會利E式期を主体とする環状集落で、中央に二〇〇基を超える土壇墓群、その外側にピット群、外縁

に住居址群という同心円状の集落で、土壇墓群には琥珀の玉などが発見されている。また、土偶なども出土し、既発見住居址約50軒。東隣りの多摩信事務センター遺跡は勝坂式期を中心とした集落で、向郷遺跡との関係が注目される)。国立市南養寺遺跡(勝坂式期から加會利E式期にかけての集落遺跡で、既発見住居址約80軒。本遺跡は加會利E式期前半に一時的断絶がある。また、中期末に敷石住居が多く、住居址奥壁に壺を納置したものも発見され、屋内での祭祀儀礼の存在を示している。顔面把手や人体文、動物文などの優れた土器を出土し、顔面把手は8例が発見されている)。

右の各遺跡を概観すると、環状集落が多いこと、勝坂式期から加會利E式期に継続し、龍津寺東遺跡など一部を除いて後期に継続しないこと、つまり、中期末で断絶する遺跡が多いなどの一般の特徴を抽出することができる。ただ、南養寺遺跡のように、本地域での縄文集落が一つのピークをなす加會利E式期前半に空白期があり、断絶する遺跡が存在するケースもあり、集団の移動という問題を考慮しなければならぬ。移動の背景は優れて社会的要因が想定され、一見継続性のみられる集落でも、果して季節的移動などがなかったかどうか、検証の困難な問題でもある。

多摩川中流域では明確な祭祀的遺構の発見されたのは、山根坂上遺跡の配石址と向郷遺跡の土壇墓とそれを取り巻

くピット群であろう。山根坂上遺跡の配石は、集落の中央広場北側に、径12メートルで弧状に配されたもので、最大の礫は長さ1メートルを超えるものである。礫の多くは多摩川から運ばれたものであり、この場を中心にしたような祭祀儀礼が執り行われたかは不明であるが、少なくとも集団の成員全体が係わる大事であったことは想像に難くはない。また、向郷遺跡の土壇墓群とそれを取り巻くピットは祖霊崇拜の祭りの場が存在したことを示している。類例は岩手県西田遺跡の同心円状集落があり、縄文集落の典型型として捉えることができる。他に、南養寺遺跡の敷石住居址や各遺跡の加曾利E式期にみられる埋甕なども呪的儀礼と深く係わっている。

これら祭祀性の窺える遺構は、いずれも加曾利E式期のものであり、祭祀儀礼の盛行と後期における急激な衰退は無関係ではないと思われる。その背景は約四〇〇〇年前の汎世界的気候変動と関連づけて説明される場合が多い。この時期、中・高緯度地方では寒冷化が、低緯度地方では乾燥化が進んだとされ、自然環境に変化があったことが指摘されている。気候の寒冷化は植生に変化をもたらし、植物質食料の採集経済に多くを依存していた中期縄文人の生活に、大きな影響を及ぼしたことが想定される。中期末以降、関東地方では臨海地域の発展が著しく、大規模貝塚などに象徴される漁撈活動の活発化が認められる。多摩川中流域

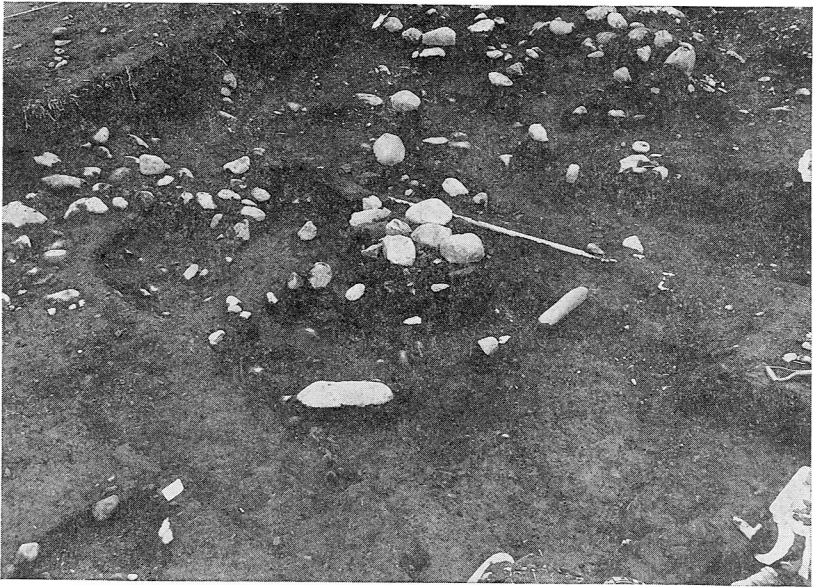
でも、後期まで継続した龍津寺東遺跡などでは、漁撈具とされる石錘が爆発的に増加することから、河川での内水面漁業も活発化したことが証明される。

2 集落と土壇墓群

長沢遺跡はこれまで八次に亘る調査で勝坂式期から加曾利E式期にかけての集落遺跡であることが確認されている。気候的にはピピッサマールの優温期から中期末の寒冷化に向う時期で、他の大部分の集落同様後期には継続していない。

長沢遺跡の第八次調査は福生市立第一小学校の北、福生保育園の建替え工事に関わるもので、十数軒の住居址が発見されたが全て勝坂式期に属するものである。本遺跡の北端、福生消防署付近の第一次調査地点は加曾利E式期の住居址が密集することが確認されている。即ち、遺跡の南端は勝坂式期、北端は加曾利E式期という明確な違いを有し、時間的経過の中で住居域が移動したことが明らかになった。また、第三次調査地点に住居址はなく、第六次調査など周辺部で住居址が発見されていることなどを考え合わせると現時点では環状集落を想定できる。しかし、最終的に環状集落と想定される長沢遺跡での在り方は、環状集落が結果として存在する見かけ上の形態であることを物語っている。

小林達雄は環状集落について「一時期に住居が円形に並



第2図 土墳墓群（第二次調査）

ぶということが現実にはなかったが、それ相応の理由があったとみなくてはならない。つまり堅穴住居が建てられた居住域とは別に、広場もまた意識的に設計され、維持されたのであり、住居の配置によって結果的あるいは第二義的に空間が形成されたという程度のもではなかったかと理解すべきである。^{注3}と述べている。従って、見かけ上の環状集落、結果としての環状集落は、むしろ集団結集の場としての集落中央の広場を前提として成立したと考えるのが妥当であろう。

では、中央の広場とは何か。縄文人に限らず、原始社会では集落の中央広場はしばしば神聖な場所であり、集団結集の機能を有する場でもある。縄文集落の場合、中央に墓域を有するものが多いことは周知の通りで、祖先を葬り祀る神聖な場として意識されていた。長沢遺跡では、第二次調査の折に十数基の土墳墓が集落中央部の西寄りで見えられ、中央に墓域を有する集落の類型に含めて考えられる。

長沢遺跡の土墳墓^{注4}は長径1.2〜2.0メートルの楕円形プランを主体とし、縁石を有するもの、礫が覆う状態のもの、土壇底面に土器を埋設するものなどのバラエティーがある。

縁石を用いたものは墓標の意味も有したであろうから、当然、死者の個人を識別、特定する役割を担ったと思われる。また、壇底の埋設土器は胴下部を欠くもので、埋甕の在り方と一致する。所謂埋甕が、通説的に言われるような胎盤

収納、幼児骨埋納などとするならば、本埋設土器も改葬などによる遺骨の収納などの機能を考えることも可能である。

次に、第三次調査の3号土坑は坑底近くから粗大石匙が発見された。墓壇内から石匙の出土する例は、八王子市神谷原遺跡に顕著であるが、副葬品か着装品かは問題のあるところである。私は縄文中期の土壇墓に際立った副葬品がみられないことから、石匙のようにつまみをもち、紐で結んで携帯できるような石器は着装品とした方が自然のように思われる。また、長沢遺跡では土壇墓群の周辺から、本遺跡唯一の台付土器が出土しており、墓への供献を伴った祭祀儀礼の存在が推測される。

いずれにしても、長沢遺跡の土壇墓群は勝坂式期から加曾利E式期へと連続しており、この間居住域は移動したにもかかわらず、墓域を共有した存在り方は、長沢縄文人が同一集団の継続であることを証明している。集団墓の成立には安定した定住生活が不可欠である。その意味で、この土壇墓群の背景には、祖霊崇拜とともに豊かで安定した彼等の生活が存在したことを示唆している。

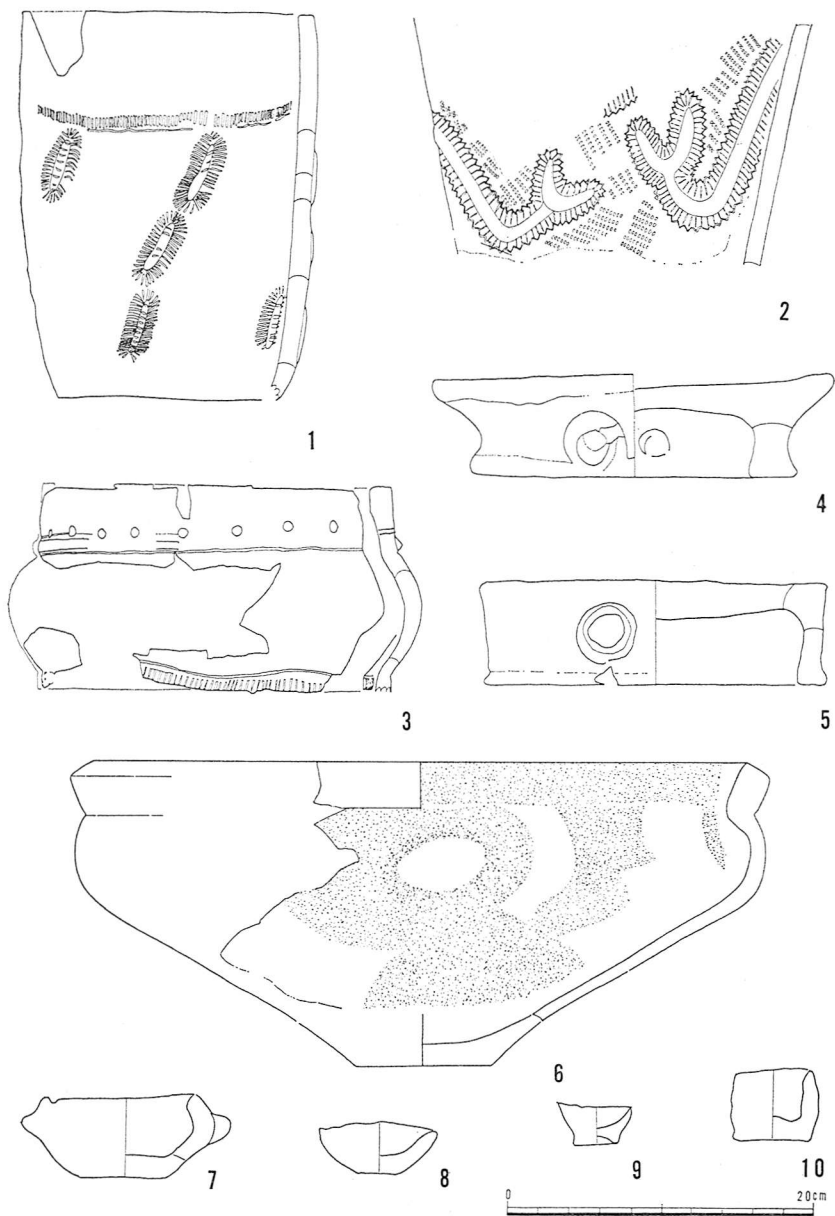
長沢遺跡第八次調査では、他に十基の土坑が住居域と重複する状態で発見された。これらの土坑は規模・プランもまちまちで、性格も多様なものと考えられる。この中に土壇墓がないとは断言できないが、概ね貯蔵穴等の生活関連遺構と推測される。また、第八次調査では18基の集石土坑

が発見された。集石土坑の多くは調理施設であるが、果して、石を焼き、その中で蒸し焼きにするという手のこんだ調理方法が日常的調理かどうかは問題を含んでいる。私は何らかの非日常的儀礼などに伴う特別の調理施設であった可能性もあると考えている。集石土坑の坑底に敷石をもつものは多摩川中流域の特徴的存在であり、他地域にはみられない。こうした共通要素を共有する集団は、互いに直接の情報交換の紐帯で結ばれた共同体であり、集落単位を超えた結合が予想される。

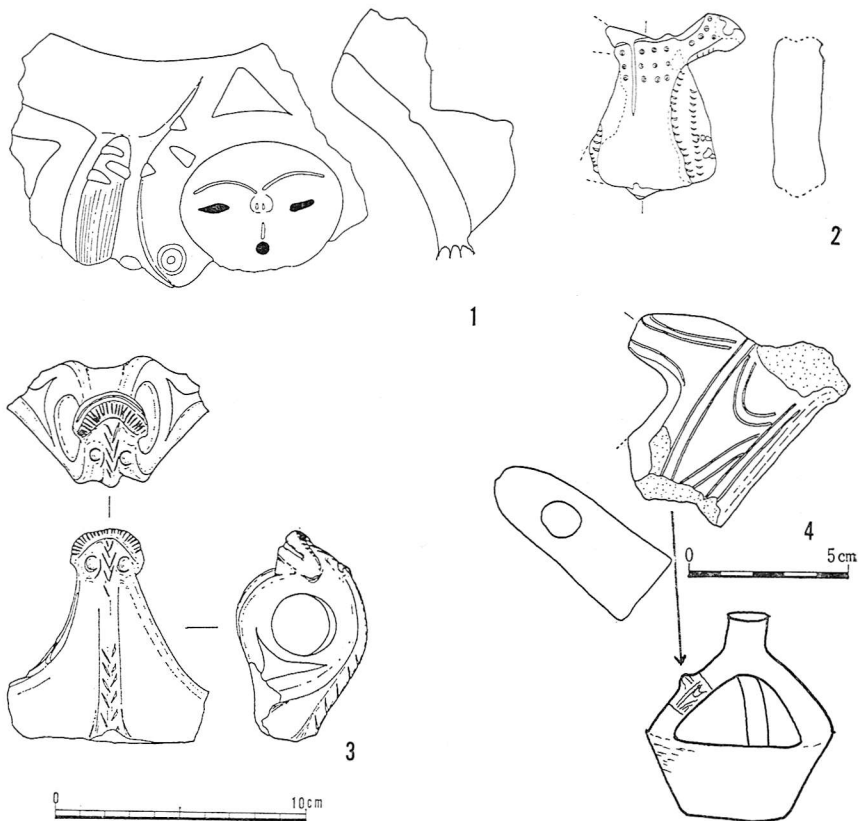
3 土器に見る心性

遺物の中で圧倒的多数を占めるのは土器と石器である。

大量に出土する石斧には当然木製の柄が、石鏃には弓や矢柄の存在がなければ機能しない。長沢縄文人の日常には大量の木製品、カゴを始めとする竹製品、紐・縄・編布といった繊維製品などが存在した筈である。しかし、そうした有機質の物質は全て失われている。また、貝塚遺跡の例などからすると、狩猟によって得られた動物の八割以上はシカ、イノシシである。獲物は食料はもとより、皮革・骨角に至るまで余すところなく利用されたと思われるが、それらは全く残存しない。こうした限られた条件の中で、彼等の生活復元を図ることは著しい困難を伴う。ここでは、実証的学問としての考古学の立場から、物質的残存物の中か



第3図 長沢遺跡の各種土器



第4図 特殊な土器装飾

ら、長沢縄文人の精神文化に迫ってみたいと思う。

最も多い遺物は土器で、日常的煮炊きに用いられる深鉢形が圧倒的に多いのは当然である。そして、土器には必ず文様が施されている。土器文様には器面を飾る装飾的要素があり、装飾するという概念そのものが人間の精神性の徴表とすれば、全ての土器は物質的存在であるとともに精神的存在でもある。土器文様には時期的変化が跡づけられるが、文様構成、個々の文様要素、それを表出する因子が存在する。土器文様は時に人体や蛇、イノシシといった具象的表現もみられるが、図案化、抽象化されたものも多い。

第3図1はワラジ虫文と呼ばれる不気味な貼付文、2は人か動物の腕の動きを表現しているように見える。一般に中期の土器には胴部に垂下する曲線文や刻み目をもった隆線文が多用される。第4図3はママシを表現した蛇体把手であるが、ママシの体部は刻み目

をもった隆線で表現されており、蛇の頭部の有無に係らず、この施文手法が蛇を意識したとみることも可能である。また、しばしば用いられる円文は月や太陽を抽象化したものとも考えられる。こうした縄文土器の文様には、彼等の神話的世界の表現が実はあり、単に現代の我々がその意味を読み取ることができないだけで、縄文人の並々ならぬ情念の表出であるかも知れない。

縄文土器は時に破損したものを補修して使うこともあれば、完全に使用に耐えるものを一括廃棄することもあり、長沢遺跡にもそうした例はある。これは単なる使い捨てとは思われず、祭祀儀礼等に使われた土器を祭儀の終了と共に使命を終えたものとして「死」を与えたか、土器文様の神話的世界の否定に連なる「死」であるのか、またはそれ以外の意味が含まれるのか明らかでないが、廃棄という行為にも精神的意味が存在したことは首肯されよう。

縄文人の世界には非日常的土器も存在した。美事にデフォルメされた勝坂式土器は、ハレの場を飾るに相応しい存在である。第4図1は本遺跡の第二次調査で出土した人面付土器である。可愛らしい顔付きのこの土器は、勝坂3式期のもので、把手状ではなく器体の上部に貼り付けられたものである。把手状の顔面は、顔が器体の内を向くものと外を向くものがあり、それぞれの意味が追及されているが、本例は明らかに外を向く仲間である。なお、顔面把手に類

似したもので、俗にミミズク把手と呼ばれるものがあり、何らかの動物または人面把手の一種とみられ、長沢遺跡からも数点出土している。こうした造形は、日常的調理の具に供するには反って邪魔になり、機能を超越した存在理由が思考され、何か特別の意味が込められていたものと思われる。

土器では他に供献の具と推定される浅鉢形土器や器台がある。第3図6は第一次調査で出土した浅鉢である。内面に円形状、雲形状に塗された痕跡があり、非日常的容器的性格を示している。赤色塗彩された浅鉢は他にも認められ、特に加曾利E式期に多い。浅鉢は供献とともに、集団での共食の器でもあり、それは何らかの儀礼に関係するものであろう。器台は第八次調査で第3図4・5に見られる優品が出土した。出土状態や半割された廃棄の状況は、意識的所作による可能性を窺わせる。器台は勝坂式期に顕著な存在で、脚台に孔を有する製作は後世の高杯に連なるもので、供献の器としての性格を具備している。供献の具が存在することは、供献される対象物が存在する訳であり、それは祖霊か豊饒を祈念する儀礼か、推測の域を出るものではない。

他に特殊な土器として有孔罌付土器がある。第3図3は胴下部を欠失したもので、第八次調査で出土した。私は破片ではあるが第二次調査地点の一角に、有孔罌付土器の集

中する場所があることを指摘した。有孔鍔付土器は醸造具説、種子保存説、太鼓説などがあるが、少なくとも加曾利E式期の有孔鍔付土器のように、鍔を上下に貫通する孔の存在は、醸造具説で論拠とされた発酵時のガス抜き穴としての機能は果さず、否定せざるを得ない。太鼓説が正しいとすれば、長沢遺跡の有孔鍔付土器集中地点は、太鼓を打ち鳴らし、何らかの祭儀が行われた場所であったと想像される。祭儀に音楽は不可欠であり、縄文時代には土鈴や土笛の存在が知られている。奏楽による儀礼の荘厳もまた祭儀の重要な要素であった。

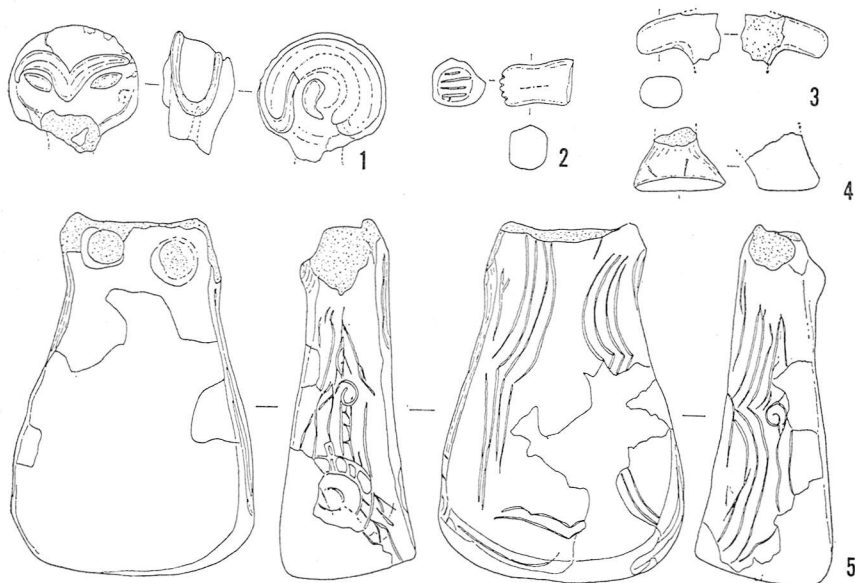
なお、縄文中期には中部山岳を中心に、東は南関東西部、西は石川県・岐阜県にかけて釣手形土器という特異な土器が盛行する。私の調査^{注5}では完形土器約50例が知られているが新発見や遺漏も多いので、実数は更に増加する。釣手形土器は完形品で出土する率が多く、特殊な取り扱いが想定されるが、天龍川水系では破片で出土するものが多いといわれている。如何なる形にせよ、土器は使用による破損は避けられず、破片で出土することは十分有り得る。釣手形土器は浅鉢の器体に釣り手が付くもので、釣り手部分の特徴的部位がなければ釣手形土器の認定は困難である。従って、土器片として処理されている遺物中に混在している可能性はある。本遺跡では第三次調査で土偶の一部かと思われる土製品を紹介したが、今回改めて精査したところ加曾

利E式期の釣手形土器の一部であることが判明した。第4図4に見られるように、紐通しの孔があり、ブリッジが三方向に配される三窓形釣手土器と推定される。釣手土器は灯明具としての機能が想定されており、その灯は小さくとも祭儀に関わる聖なる灯であったと思われる。因に、山根坂上遺跡では完形の釣手形土器三例が出土し、長野県大深山遺跡の四例に次ぐ多出遺跡である。

他にミニチュア土器の存在にも留意しなければならない。第3図7～10は第八次調査出土のものである。ミニチュア土器には玩具説などもあるが儀器的側面も見受けられ、やはり祭祀儀礼に関わる非日常的遺物と認識すべきであろう。

4 土偶と人体文

縄文祭祀を代表する遺物は土偶である。長沢遺跡では度重なる調査にもかかわらず、土偶は発見されなかった。ところが第八次調査では第5図に示したものなど計8点が発見された。このことは、長沢遺跡でも勝坂式期には土偶祭祀が盛んであったことを示している。1は頭部で胴部との結合を強化するため、芯に棒状のものが差し込まれていた状態が観察される。顔面は柿の種状のつり上がった勝坂式特有の目、後頭部には渦巻状の隆線が施されている。2・3は手で、2は四本の刻みで五指を表現している。4は足部、5は頭・手足を欠く胴体で、乳房の表現や大きな臀部

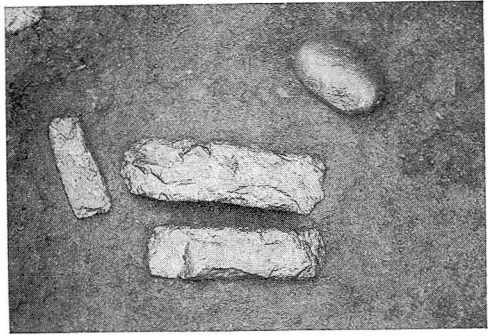


第5図 土偶（第八次調査）

に女性を象徴し、繊細な沈線で渦巻文や弧状文が描かれている。

土偶は古来、神像説、護符説、玩具説など様々な機能が想定されてきた。特に、戦後、藤森栄一は縄文農耕論と結びつけ「原始的な地母神信仰は、諸原始民族の初期陸耕生活の象徴である。日本縄文時代中期文化の場合、土偶も明瞭にその一証拠であろう」とし、土偶を地母神とし、原始陸耕との関連を論じている。また、土偶は毀れて出土することが多く、より積極的には毀す目的で作られたとされる説さえ提出されている。確かに破損例は多いが、もともと毀れ易い土製品であれば、土器と同様毀れて出土するのは至極当然ともいえる。第5図1のように棒を差して頭部の脱落を防ぐための補強措置がとられたものすら存在するのである。私は土偶が女性しかも妊娠した姿態のものが多い点からすれば、安産祈願とそれに象徴される万物の豊穰を願う祭祀と考えている。

第4図2は人体文土器の一部である。体部と手の部分が残存したが、胴上部には土偶などにはしばしば表現される正中線、下腹部には女性性徴が表現されている。また、小さな竹管による円形刺突文が施されているが、この文様は土器装飾文様としても用いられるが、時間を超えて土偶の装飾文様に用いられている。円形刺突文には縄文人の特別の觀念が込められていたものと思われる。なお、本土器と同



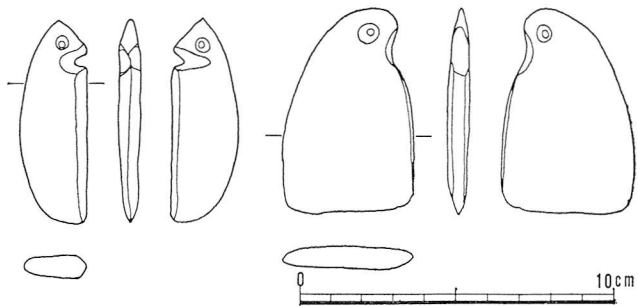
第6図 大形打製石斧の出土

じ製作の人体文土器は、国立市南養寺遺跡に完形の優品がある。南養寺遺跡の人体文^{注7}は一括廃棄の土器中に含まれ、極めて祭祀性の強い在り方を示していた。

5 石器と装身具

石器は大方実用の利器である。しかし、美麗に磨かれた小形

磨製石斧や優美な製作の尖頭器などを見ると、果して単に実用のみに供されたものか否か疑念を抱かせるものもある。長沢遺跡をはじめ、多摩川流域の縄文中期遺跡を代表する石器は打製石斧で、全出土石器の八割以上を占めている。打製石斧は土掘り具であるが、中には実用を超越したのもあったと推察される。第八次調査では、本遺跡で最大の長さ26センチと22センチの超大形打製石斧が二点並んで出土した。この出土状態は単に遺棄されたというよりは、何らかの呪的儀礼の存在を感じさせる。通常の打製石斧が長さ10センチ前後で、着柄使用するのに適した大きさである



第7図 石製垂飾

のと対照的に、非実用、祭祀的要素が強く感じられる。こうした感覚的捉え方は説得力に欠けることは十分承知しているが、他遺跡にも超大形石斧が存在し、今後、生産用具の中の特殊なものについては更に検討を要する課題であると思う。狩の豊猟を願う祭儀が想定されるなら、打製石斧に象徴される採集活動の豊穰を願う祭儀が存在しても不思議ではない。

また、第八次調査では本遺跡で初めて装身具が出土した。灰白色、青灰色の優美な石製ペンダントである。これは、玦状耳飾の半欠品を再利用したものであるが、縄文人の装身具は単なるオシャレ感覚を超え、着装することが呪的効果をもたらすと考えられていた。少なくとも縄文中期の段階でこうした装身具を身に着けた者は極く限られた人であ

る。近接して出土した2点のペンダントは、呪術者など特異な人物の存在を示すかも知れない。また、私は青灰色のペンダントには縄文人の色に関する特別の想念があったのではないかと思う。例えば、ヒスイの大珠、玦状耳飾などの青色を好むこと、土器に塗られた朱の赤色などは儀礼の場の莊嚴に特別の意味をもったと考えられる。想像を逞しくすれば、二点のペンダントは長沢縄文集落の呪者の所持品で、祭儀の主役を演ずるシャーマン的人物の存在を想定させるものといえよう。

本稿はあくまで覚え書きということで、敢えてまとめや結論めいたことは控えたい。縄文の呪的儀礼が高揚するのはむしろ後晩期であり、中期には末期に盛んになる傾向が看取される。長沢遺跡の第八次調査地点は勝坂式期の集落であり、縄文文化が一つの頂点に達し、安定した生活が展開された時期である。呪術や宗教が要求されるのは、人が苦難に出会った時で、そうした時に最も真価を発揮する。その意味で中期末に盛行する埋甕や屋内での個別祭祀は、生活の厳しさに対する一つの対応策であったといえよう。

注1 和田 哲『福生市長沢遺跡』第八次調査報告(一九九三)

注2 金関 恕「呪術と祭」『日本考古学』4(一九八六)

注3 小林達雄「原始集落」『日本考古学』4(一九八六)

注4 和田 哲『福生市史資料編』考古(一九八八)

和田 哲『長沢』第一次～第四次調査報告(一九八一)

川崎義雄他『福生市長沢遺跡発掘調査概報』(一九七二)

注5 和田 哲「釣手土器考」『羽村町郷土博物館紀要』第六号(一九九一)

注6 藤森栄一「日本原始陸耕の諸問題」『歴史評論』4巻4号(一九四九)

注7 和田 哲他『南養寺遺跡』II(一九八五)
(わだ・さとし 市史原始古代担当編集専門委員 昭島市在住)